

会津勢21年ぶり4強

会津北嶺 快進撃続く



創部6年目 春の敗戦糧に

会津勢21年ぶりのベスト4だ。郡山市のヨーク開成山スタジアム(開成山野球場)で21日に行われた第105回全国高校野球選手権記念福島大会の準々決勝。磐城を破った会津北嶺は春の敗戦を糧に結束を強め、創部6年目で福島大会初の準決勝進出を果たした。準決勝で当たる学法石川は2020(令和2)年の代替大会を含めて11年ぶりの4強入りで、古豪復活を印象づけた。

(22・23面に関連記事)

全国高校野球選手権
福島大会

伝統校の磐城から11-4の七回コールド勝ちを収めると、会津北嶺ナインはベンチから駆け出し、喜びをかみしめた。「自分たちの代で必ず優勝する」と誓いを新たに拳を突き上げ、スタンドの声援に応えた。前身の若松一の野球部は2002(平成14)年を最後に部員不足で休部。2018年、当時の1年生7人を中心に会津北嶺の野球部として再出発した。同年の福島大会は大会直前に加わ

初

初の4強入りを決め、笑顔でベンチから駆け出す会津北嶺ナイン

った。2年生ともに出場したが、2回戦で日大東北に0-39の五回コールドで大敗した。

現チームは会津地方に加えて沖繩、大阪、東京、郡山市など県内外から野球に打ち込む環境を求める仲間が集った。部員は約50人。春の県大会で初の8強入りを果たしたが、準々決勝で聖光学院に0-11で五回コールド負け。「このままでは夏も後悔する」。強豪の壁の高さと、甲子園への道のりの遠さを思い知った。

選手は一日100本の素振りや欠かさず、強豪高の投手の速球を想定した打撃練習も充実させた。3年生を中心にチームの雰囲気を引き締め、練習中の雑談も減るなど意識を統一した。

この日は14安打の攻めで磐城を退け、鍛錬の成果を示した。23日の準決勝は第2シード学法石川に挑む。原太一主将は「自分たちは挑戦者。一戦一戦全力で戦うだけ」と緩みはない。ノ

ードからの甲子園まで

た。2年生ともに出場したが、2回戦で日大東北に0-39の五回コールドで大敗した。

現チームは会津地方に加えて沖繩、大阪、東京、郡山市など県内外から野球に打ち込む環境を求める仲間が集った。部員は約50人。春の県大会で初の8強入りを果たしたが、準々決勝で聖光学院に0-11で五回コールド負け。「このままでは夏も後悔する」。強豪の壁の高さと、甲子園への道のりの遠さを思い知った。

選手は一日100本の素振りや欠かさず、強豪高の投手の速球を想定した打撃練習も充実させた。3年生を中心にチームの雰囲気を引き締め、練習中の雑談も減るなど意識を統一した。

あと2勝。快進撃はまだ終わらせない。

会津勢の躍進を周囲も注目している。会津若松市のスポーツ用品店「パンダイスポーツ」マネージャーで中学校部活動の軟式野球で週末台同練習を指導している

小林恭兵さん(35)は「会津のチームが4強に残り、盛り上がる」と喜ぶ。会津工で白球を追った。「久しぶりに会津勢が終盤まで勝ち進んだ。身近な学校の活躍は野球に打ち込む子どもの励みになる」と話した。

軟式野球クラブ「小金井ブレイブス」で内野手や投手としてプレーする佐藤孝樹さん(11)は「本郷小6年」は「近くの学校が勝ち上がり、うれしい」と声を弾ませた。「甲子園に出場してほしい」と期待した。